

## 浅間山の火山活動解説資料（平成 30 年 8 月）

気象庁地震火山部  
火山監視・警報センター

浅間山では、火山性地震はやや少ない状態となり、浅間山の西側の膨張を示すと考えられる地殻変動もみられていません。また、山頂火口からの噴煙や火山ガス（二酸化硫黄）の放出量も少ない状態となっています。これらのことから、浅間山の火山活動は低下しており、火口から500mを超える範囲に影響を及ぼす噴火の可能性は低くなったと判断し、30日に噴火予報を発表し、噴火警戒レベルを2（火口周辺規制）から1（活火山であることに留意）に引き下げました。ただし、火口から500mの範囲に影響を及ぼす程度のごく小規模な噴火の可能性がります。火山灰噴出や火山ガス等に注意してください。地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

## 活動概況

- ・噴煙など表面現象の状況（図1、図3- 、図4- ）  
山頂火口からの噴煙は、2018年5月頃から、概ね少ない状態となっています。山頂火口からの噴煙は白色で、火口縁上概ね200m以下で経過しました。また、火映<sup>1)</sup>も2018年7月19日以降、観測されていません。
- ・火山ガスの状況（図3- 、図4- ）  
火山ガス（二酸化硫黄）の放出量<sup>2)</sup>は、2018年5月以降、少ない状態です。20日の観測では、1日あたり200トン（6月26日：100トン/日）でした。
- ・地震や微動の発生状況（図3- ~ 、図4- ~ 、図5、図6、図10）  
山頂直下のごく浅い所を震源とする体に感じない火山性地震は、2018年6月頃からやや少ない状態で経過しています。2018年5月頃から比較的振幅の大きいBH型地震が時々発生していましたが、8月上旬以降みられなくなっています。  
火山性微動は、少ない状態で経過しています。
- ・地殻変動の状況（図3- 、図4- 、図7~9）  
傾斜計<sup>3)</sup>で、2016年12月頃からみられていた浅間山の西側の膨張を示すと考えられる地殻変動は、2018年に入ってから停滞しています。またGNSS<sup>4)</sup>連続観測でも、浅間山の西部の一部の基線で、2017年秋頃からみられていたわずかな伸びの変化は、最近停滞しています。

1) 赤熱した溶岩や高温のガス等が、噴煙や雲に映って明るく見える現象です。

2) 火口から放出される火山ガスには、マグマに溶けていた水蒸気や二酸化硫黄、硫化水素など様々な成分が含まれており、これらのうち、二酸化硫黄はマグマが浅部へ上昇するとその放出量が増加します。気象庁では、二酸化硫黄の放出量を観測し、火山活動の評価に活用しています。

3) 火山活動による山体の傾きを精密に観測する機器。火山体直下へのマグマの貫入等により変化が観測されることがあります。1マイクロラジアンは1km先が1mm上下するような変化量です。

4) GNSS（Global Navigation Satellite Systems）とは、GPSをはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称です。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページ（[https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOC/K/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.php](https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOC/K/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php)）でも閲覧することができます。

次回の火山活動解説資料（平成30年9月分）は平成30年10月9日に発表する予定です。

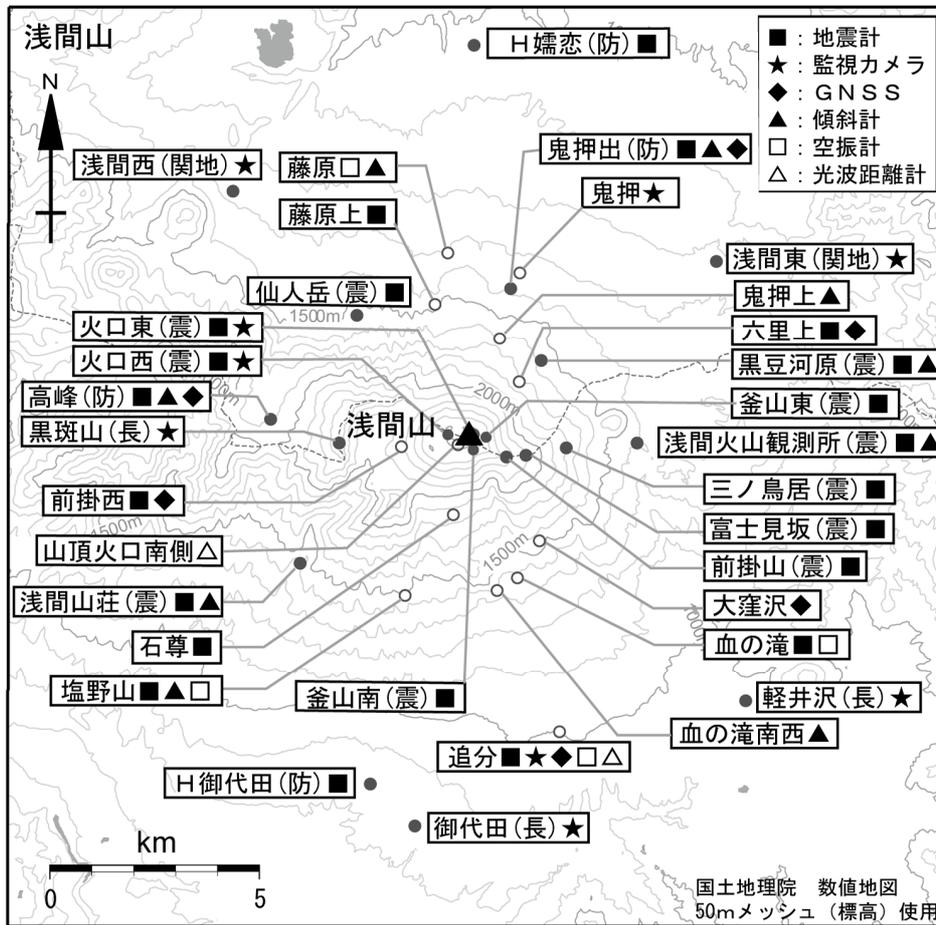
この資料は気象庁のほか、関東地方整備局、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び長野県のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』『数値地図25000（行政界・海岸線）』を使用しています（承認番号：平29情使、第798号）



図1 浅間山 山頂部の状況

(左: 鬼押監視カメラ(8月14日) 右: 黒斑山監視カメラ(長野県)(8月10日))  
 ・今期間、白色の噴煙が火口縁上概ね200mで経過しました。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。  
 (国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所、(震): 東京大学地震研究所、  
 (関地): 関東地方整備局、(長): 長野県

図2 浅間山 観測点配置図

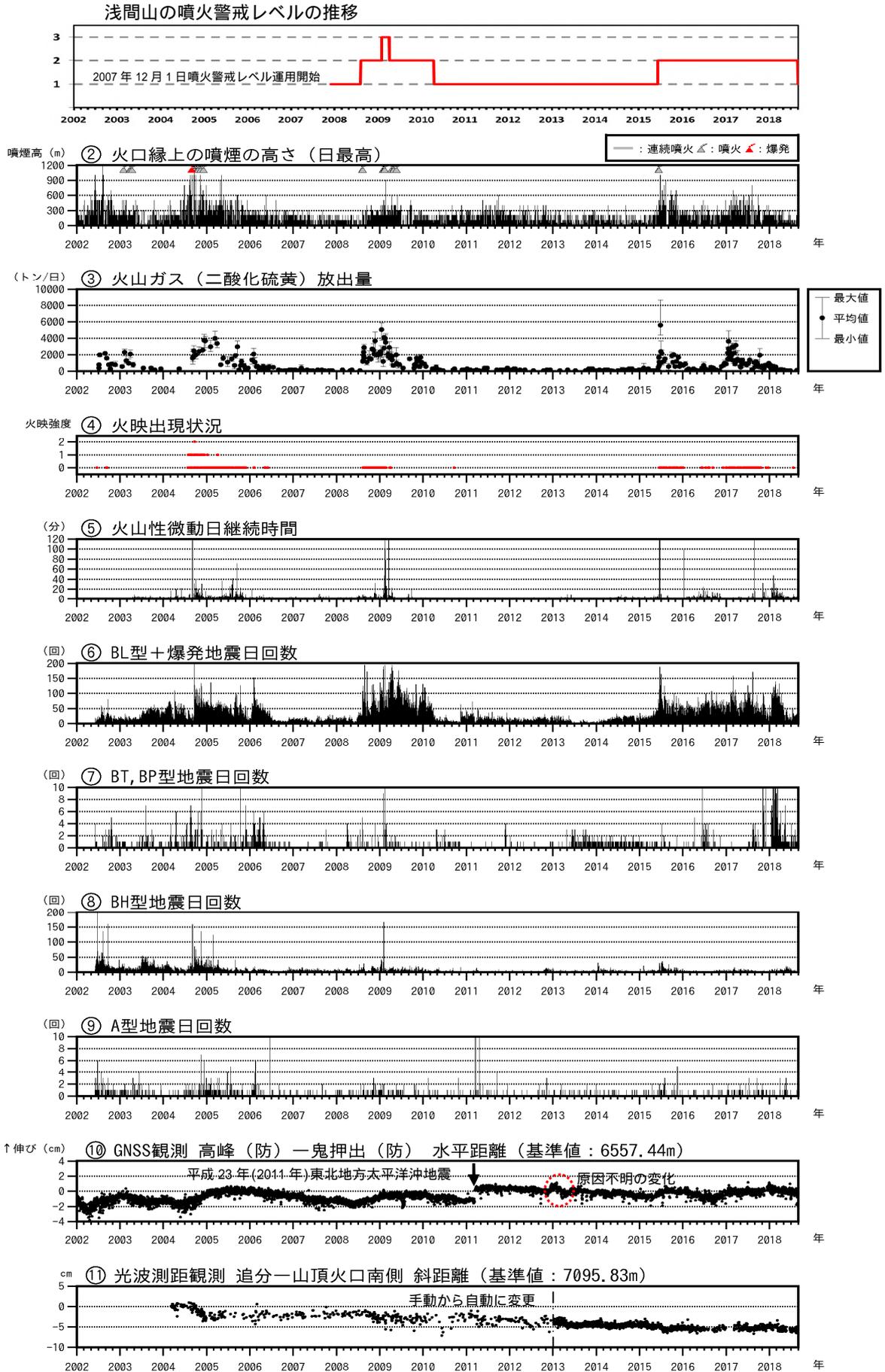


図3 浅間山 火山活動経過図（2002年1月1日～2018年8月31日）  
図の説明は次ページに掲載しています。

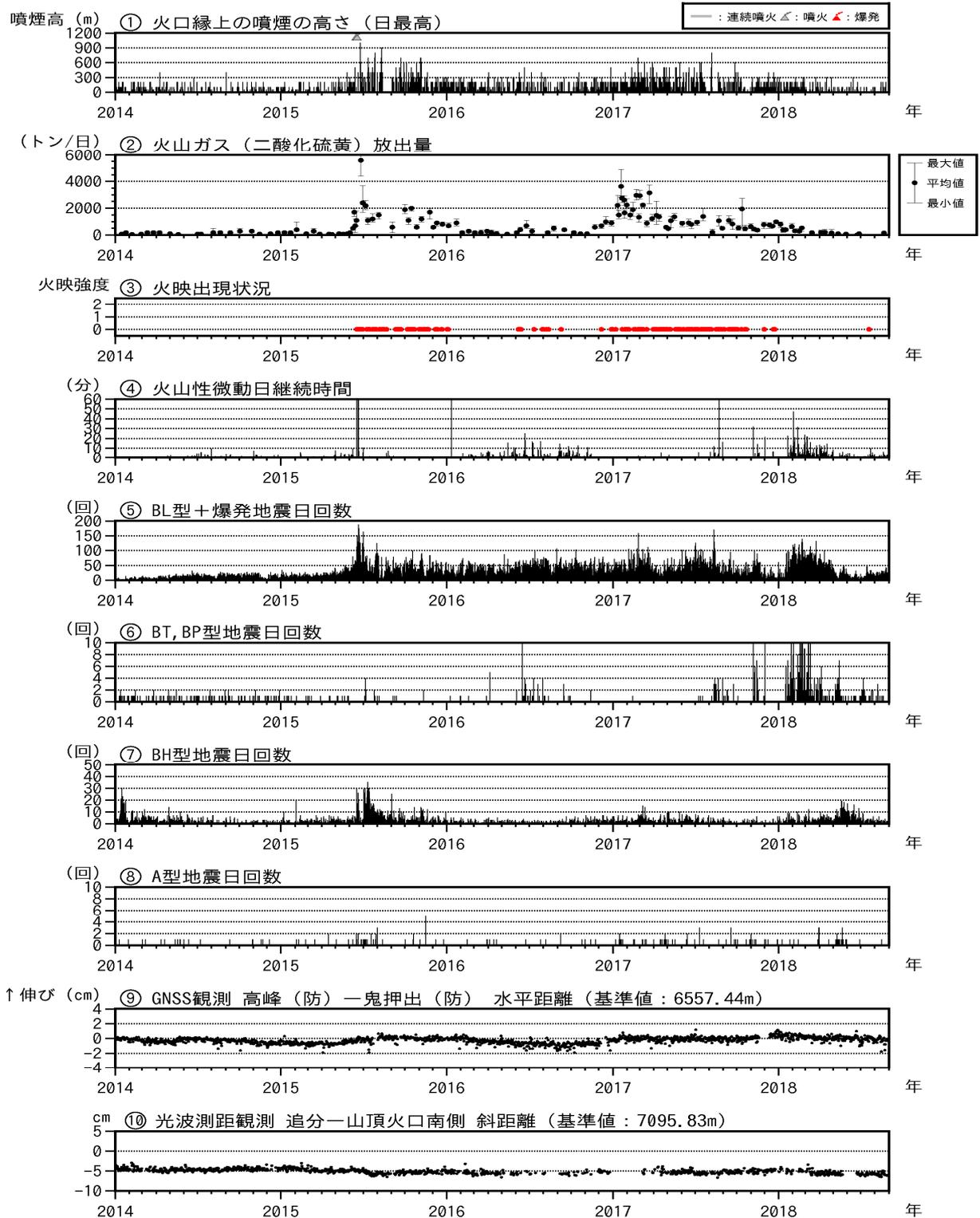


図4 浅間山 最近の火山活動経過図（2014年1月1日～2018年8月31日）

図3及び図4の説明

計数基準は石尊観測点で最大振幅0.1 $\mu$ m以上、S-P時間3秒、火山性地震の種類は図10のとおりです。

図3、図4 噴煙の高さは定時観測（09時・15時）の日最大値です。

図3、図4 国立研究開発法人産業技術総合研究所及び東京大学による観測結果が含まれています。

図3、図4 赤印は火映を示します。強度については、

0：肉眼では確認できず、高感度の監視カメラ 1：肉眼でようやく認められる程度でのみ確認できる程度

2：肉眼で明らかに認められる程度

3：肉眼で非常に明るい色で異常に感じる程度

図3、図4 2012年7月31日まで 気象庁の高峰 - 鬼押観測点間の基線長（基準値7417m）、

2012年8月1日以降 防災科学技術研究所の高峰 - 鬼押出観測点間の基線長。

2010年10月及び2016年1月以降のデータについては、解析方法を変更しています。

（防）：国立研究開発法人防災科学技術研究所

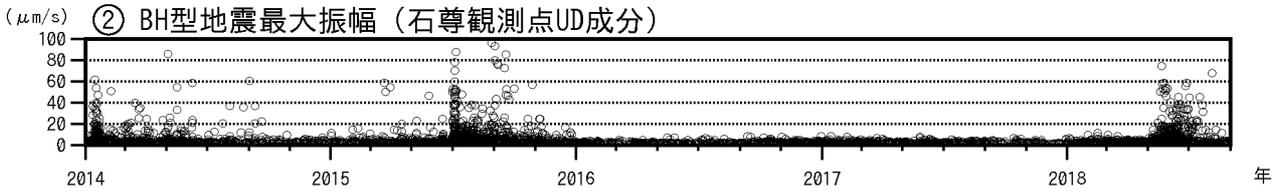
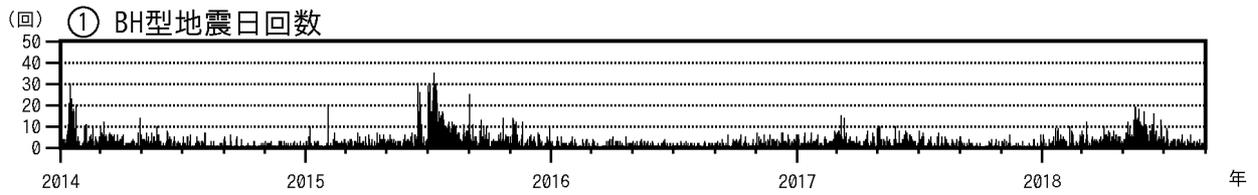
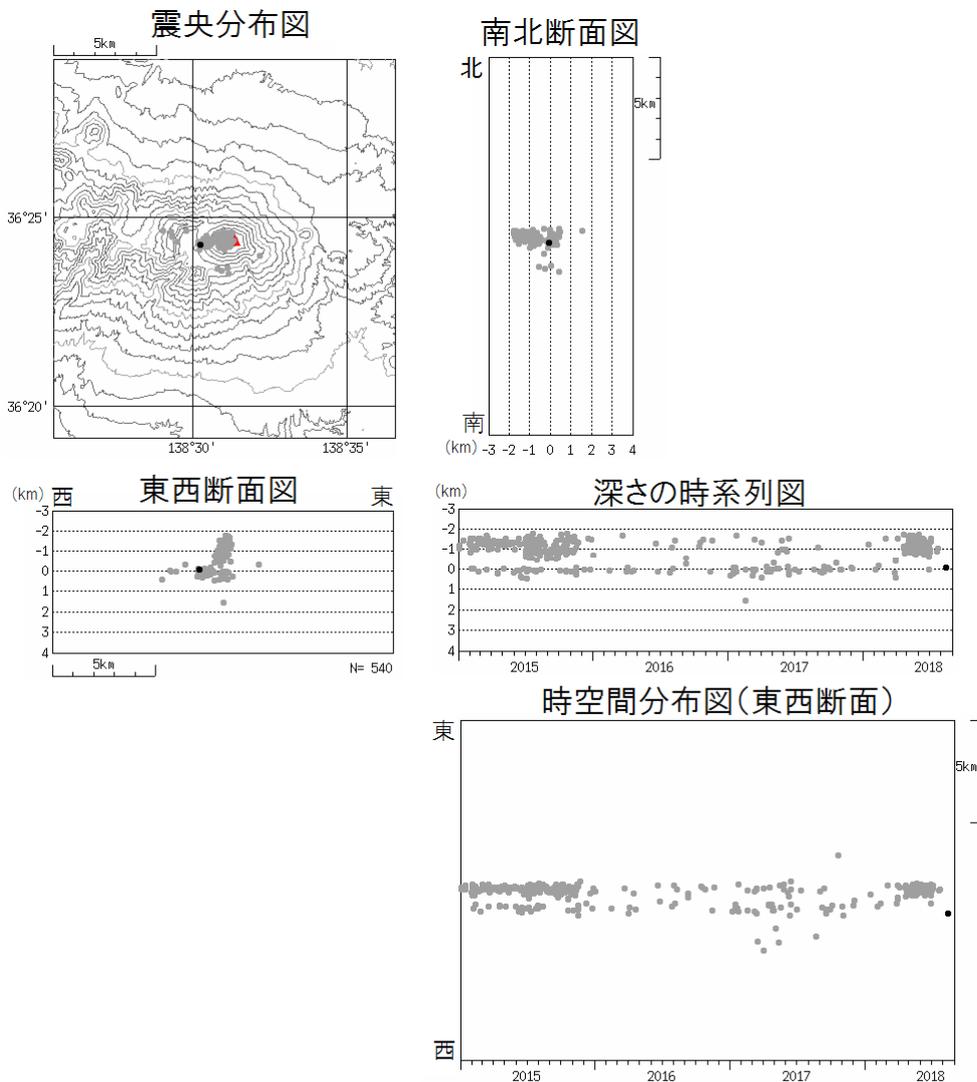


図5 浅間山 BH型地震の日別回数とその最大振幅(2014年1月1日~2018年8月31日)  
 ・2018年5月頃よりBH型地震が比較的多くなり、振幅が大きいものもみられていましたが、8月上旬以降みられなくなっています。



：2015年1月1日~2018年7月31日      ：2018年8月1日~8月31日

図6 浅間山 震源分布図(2015年1月1日~2018年8月31日)

・火山性地震の震源は、山頂西側の従来からみられているところに求まっており、特段の変化は認められません。

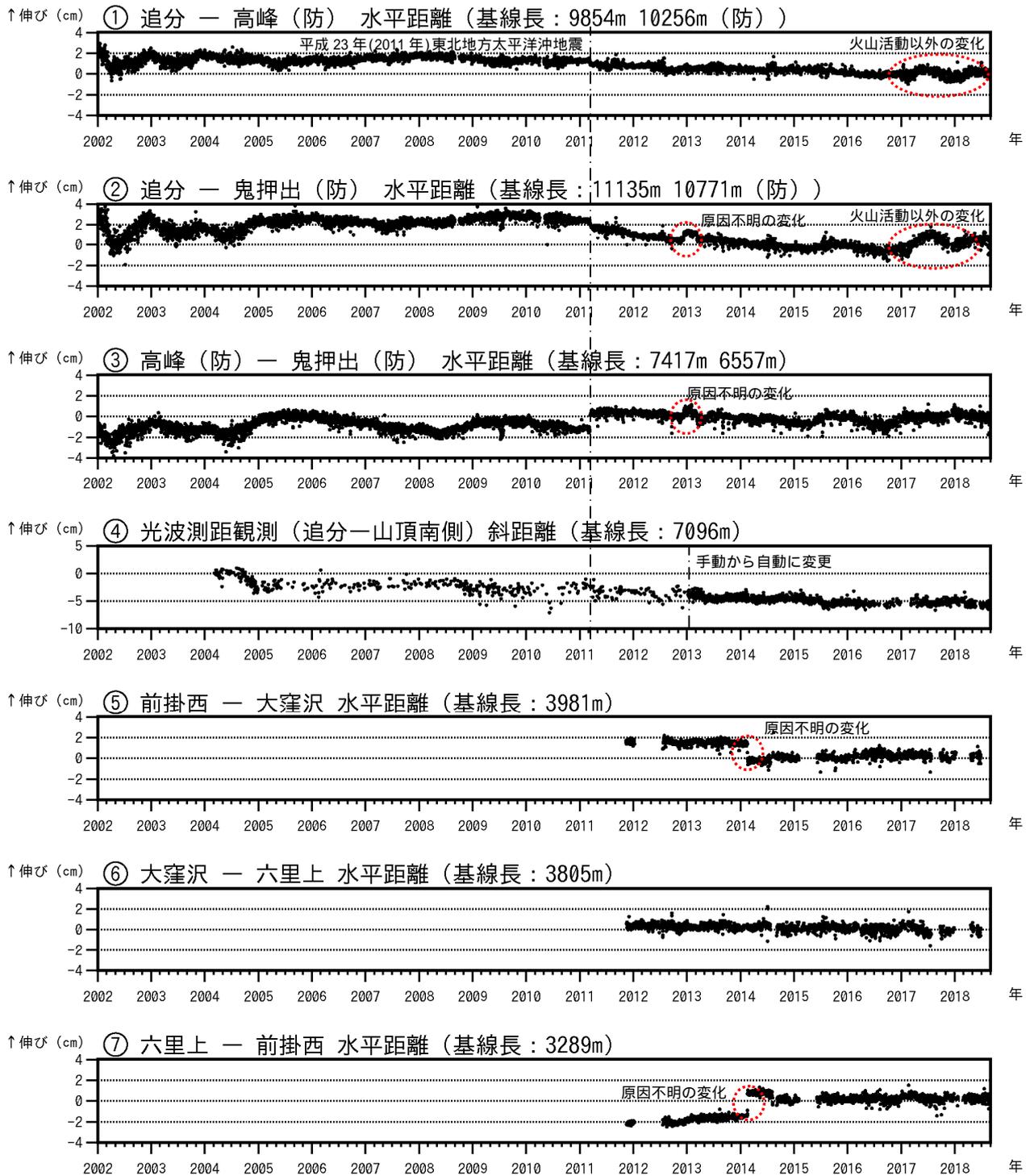


図7 - 1 浅間山 GNSS連続観測及び光波測距観測の結果(2002年1月1日~2018年8月31日)

2010年10月及び2016年1月以降のデータについては、解析方法を改良しています。

(防): 国立研究開発法人防災科学技術研究所

~ は図8の ~ にそれぞれ対応しています。

追分観測点は、2016年12月に移設しています。

2002年1月1日~2012年7月31日 気象庁の高峰 - 鬼押観測点間の水平距離。

2012年8月1日~ 防災科学技術研究所の高峰 - 鬼押出観測点間の水平距離。

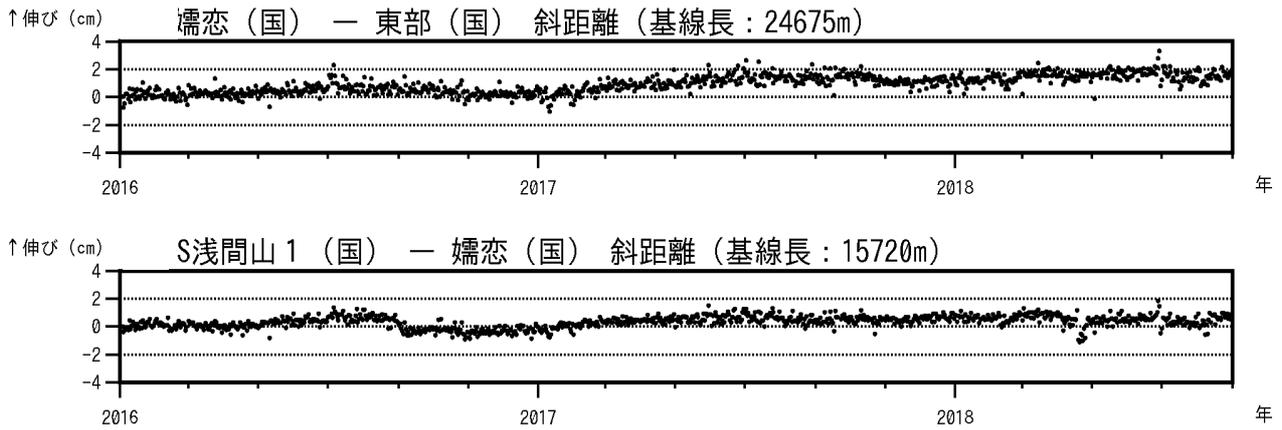


図7 - 2 浅間山 GNSS 連続観測及び光波測距観測の結果(2016年1月1日~2018年8月31日)  
 (国): 国土地理院  
 、 は図8の にそれぞれ対応しています。

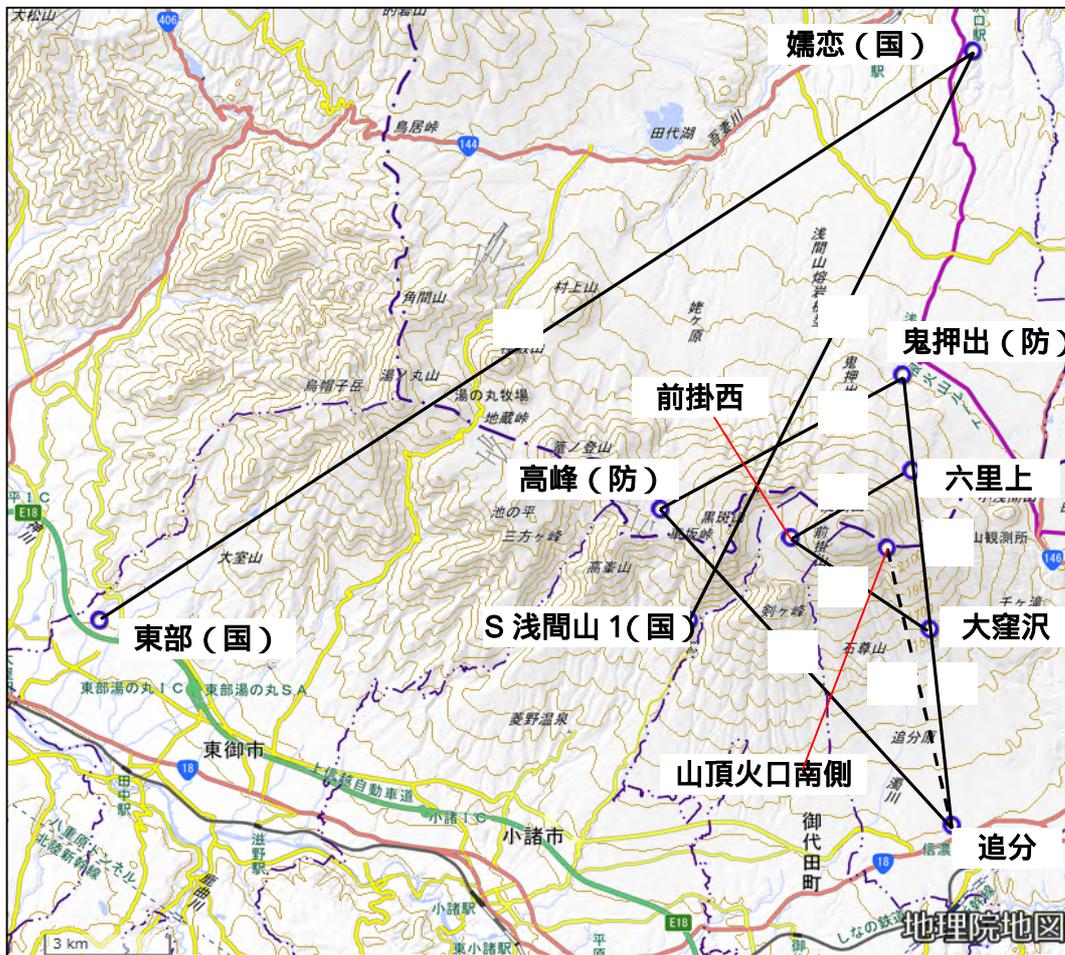


図8 浅間山 地殻変動連続観測点配置図

(防): 国立研究開発法人防災科学技術研究所、(国): 国土地理院  
 GNSS 基線 は図3の 及び図4の に対応しています。また、GNSS 基線 ~ 及び ~ は図7の ~ 及び ~ にそれぞれ対応しています。  
 光波測距測線 は図3 及び図4の 、図7の に対応しています。

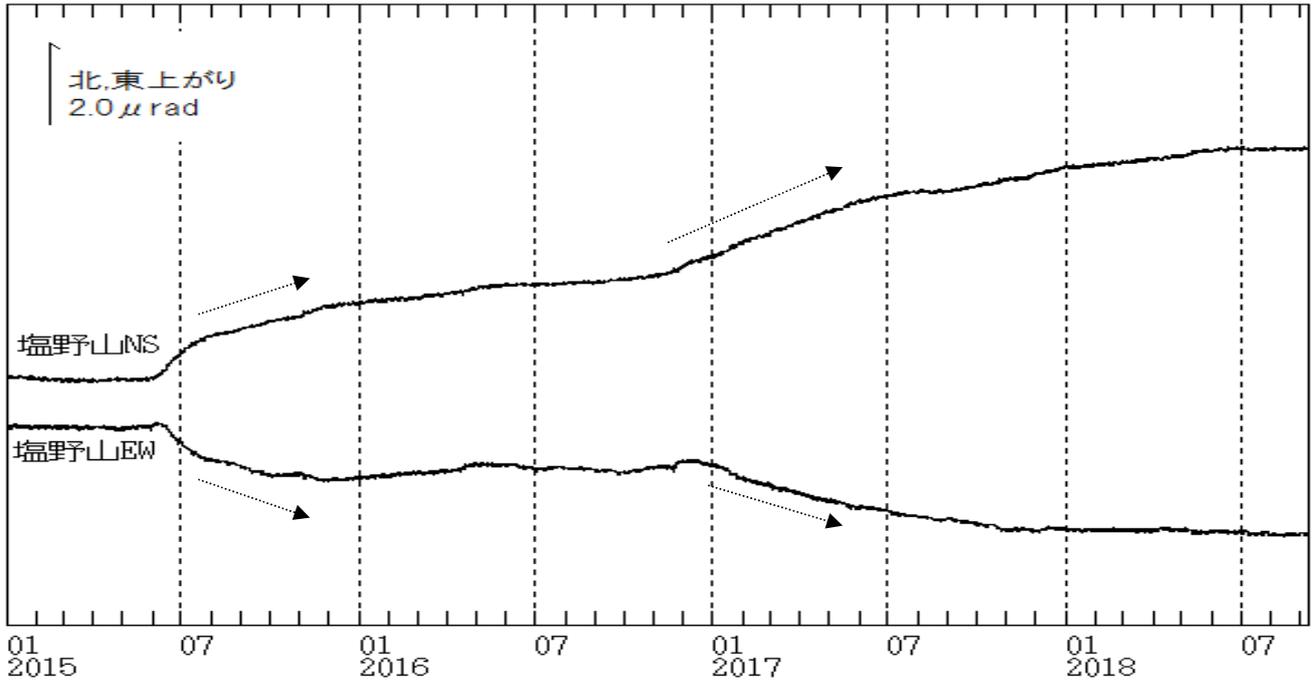


図9 浅間山 塩野山観測点における傾斜データ(2015年1月1日~2018年8月31日)

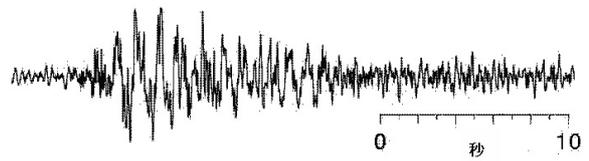
\*データは時間平均値を使用しており、2015年6月までの変化が小さくなるように補正しています。

- ・2015年6月上旬頃から山頂西側のやや深いところが膨張源と考えられる緩やかな変化がみられました。
- ・2016年12月以降、2015年と同様の変化がみられていましたが、2018年1月頃から変化はほぼ停滞しています。

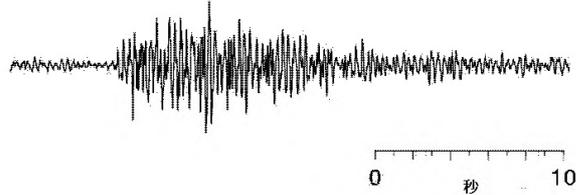
A型地震：P,S相が明瞭で卓越周波数は10Hz前後と高周波の地震



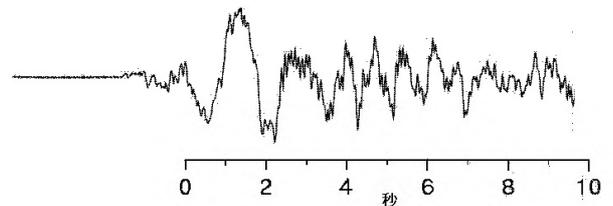
BL型地震：P,S相が不明瞭で卓越周波数が約3Hz以下の地震



BH型地震：S相が不明瞭で卓越周波数が約3Hz以上の地震



EX型地震(爆発型)：爆発的噴火に伴って発生する地震



BT型地震：一定周波数の振動がゆっくりと減衰していく地震

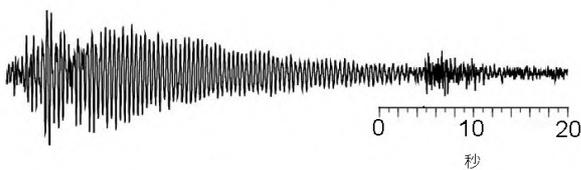


図10 浅間山 主な火山性地震の特徴と波形例